

TCFD 提言への取り組み



頻発する風水害など気候変動が社会に及ぼす影響が甚大になる中で、脱炭素社会の実現に向けて企業が果たすべき役割はより重要なものとなっており、当社は気候変動問題を重要な経営課題として捉えています。

そのため、当社は現在、使用時に排ガスを出さない充電式のOPEに注力するとともに、自社の事業活動でのGHG排出量を2040年度(2041年3月期)までに実質ゼロにする目標を掲げ、GHG排出量の削減に積極的に取り組んでいます。

これらの取り組みを含め、気候関連リスク・機会が当社事業活動等に与える影響について、ステークホルダーの皆さまと対話していくことが重要との認識のもと、当社は2021年に「TCFD(気候関連財務情報開示タスクフォース)」の提言に賛同しました。



ガバナンス

当社は、事業活動を通じたサステナビリティ課題への取り組みを全社的に推進することを目的とし、2021年に取締役社長を委員長とする「サステナビリティ委員会」を立ち上げました。

同委員会は、サステナビリティ課題の中でも特に気候変動を重要視し、GHG排出量削減の方針、施策、計画などについて審議しています。

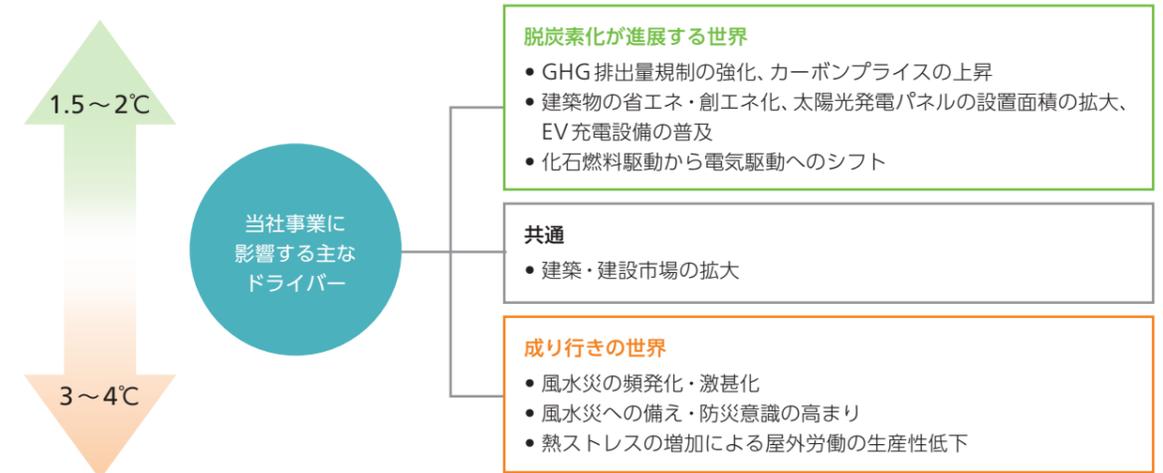
サステナビリティ委員会は重要な事項について取締役会に報告、付議し、取締役会は当該事項について審議を行うことで、当社の気候関連リスク・機会に関する監視・監督と意思決定を行っています。



戦略

(1) リスク・機会の特定

当事業に影響を及ぼす気候関連リスク・機会の特定にあたり、IEA(国際エネルギー機関)、IPCC(気候変動に関する政府間パネル)などの気候変動シナリオを参考にして、①脱炭素化が進展する1.5~2℃の世界観、②成り行きで温暖化が進行した3~4℃の世界観を整理しました。



これらの世界観をもとに、当社の気候関連リスク・機会を抽出し、それらの性質を定性的に評価した結果は以下の通りです。

リスク

タイプ	カテゴリ		リスク	発現時期	可能性
	大項目	小項目			
移行	政策・法規制	カーボンプライスの引き上げ／省エネ・低炭素規制	自社のGHG排出量に応じた操業コスト増加	短~中期	大
			原材料、エネルギー等の調達コスト増加		
	技術	製品技術開発競争	省エネ対応強化への設備投資コスト増加	短期	
			再エネ調達コスト増加	中~長期	
市場	市場価格の変化	バッテリー規制	バッテリーの調達コスト増加	短~中期	
		製品技術開発競争	環境性能(携帯性・作業効率を含む)に優れた技術・製品の開発コスト増加	短~中期	大
			容量・電圧・寿命・安全性等に優れた次世代バッテリーの開発コスト増加		
評判	情報開示要請の高まり	バッテリー需要増加による調達コスト増加	短期	大	
		半導体需要増加による調達コスト増加	短~中期		
		輸送の脱炭素化に伴う輸送コスト増加	短期		中
物理	急性	風水災の頻発化・激甚化	開示情報の他社対比劣後による評判低下	短期	中
			当社拠点における物的被害の発生		
			事業中断による休業損害の発生		
			サプライチェーンの途絶による休業損害の発生		

注：リスク発現時期の尺度 短期：~3年以内、中期：3年超10年以内、長期：10年超

機会

タイプ	カテゴリ		機会	実現時期	可能性
	大項目	小項目			
移行	エネルギー源	カーボンプライスの引き上げ	カーボンニュートラルに向けたGHG排出量削減による操業コスト減少	短～中期	大
	製品とサービス	製品技術開発競争	環境性能(携帯性・作業効率を含む)に優れた製品の開発による他社製品との差別化	短期	大
		次世代バッテリーの技術開発競争	性能が優れた次世代バッテリーの開発による他社製品との差別化	中～長期	
	市場	省エネ・低炭素規制	エンジン式から充電式への製品シフトによる市場拡大・製品需要増加	短期	大
		建築・建設市場の変化	建築物のZEB <sup>*1</sup> /ZEH <sup>*2</sup> 化、太陽光発電設備やEV充電設備の設置工事等に伴う製品需要増加		
		情報開示要請の高まり	開示情報の充実化による評判向上		中
物理	レジリエンス	気温の上昇、気候・気象の両極端化	自宅で過ごす時間の長期化によるDIY需要増加に伴う製品需要増	短～中期	大
		風水災の頻発化・激甚化	防災市場の拡大・製品需要増、被災地域における復旧・復興への貢献	短期	大
		気温の上昇	暑熱環境下における作業環境改善のための製品需要増	短～中期	

注：機会実現時期の尺度 短期：～3年以内、中期：3年超10年以内、長期：10年超  
 ※1 Net Zero Energy Building ※2 Net Zero Energy House

(2) シナリオ分析のテーマ設定

抽出・整理した気候関連リスク・機会について、事業への影響度、事業戦略との関連性、ステークホルダーの関心度等を勘案し、当社として「重要度が高い」と評価した次の4テーマについてシナリオ分析を実施し、2050年までの事業・戦略・財務への影響を評価しました。

(3) シナリオ分析結果

テーマ1(機会)：OPEの脱炭素化による充電式OPEの需要変化

テーマに含まれる機会の内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>OPE分野において、排ガス規制の導入・強化が進んでいる。</li> <li>脱炭素社会に向けて、さらなる規制強化や消費者嗜好変化を背景に、エンジン式から充電式への移行が進展し、充電式OPEの需要拡大が期待される。</li> </ul>
分析の前提条件	<ul style="list-style-type: none"> <li>OPE分野の市場予測情報を参考に、市場拡大のベースライン(成り行きシナリオ)を算定</li> <li>自動車のEVシフトに関するIEAのシナリオデータ*を参考に、OPE分野の2℃未満のシナリオデータを設定</li> </ul>
分析結果	<ul style="list-style-type: none"> <li>OPE市場の拡大により充電式OPEの市場も成り行きシナリオで拡大が想定されるが、2℃未満シナリオではエンジン式から充電式へのシフトが進展し、大きく拡大すると見込む。</li> <li>市場成長と同程度の売上規模の拡大が見込まれるとともに、シェアを拡大できればさらなる売上増が期待できる。</li> </ul>
今後の機会獲得施策	<ul style="list-style-type: none"> <li>エンジン式からの置き換えを可能とする充電式OPEの積極的な開発</li> <li>販売・サービス拠点網の拡充による、販売・サービス力の強化</li> <li>OPEの販売拡大および取扱い製品の増加を見据えた、物流機能および生産能力の増強</li> </ul>

\* IEA "EV Outlook 2021" を参考。なお、OPE分野のエンジン式から充電式へのシフトは、自動車のEVシフトよりも進展率が低くなると想定

テーマ2(機会)：建築・建設市場の拡大に伴う電動工具需要の変化

テーマに含まれる機会の内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>グローバルでの建築・建設市場の拡大によって、電動工具の需要拡大が見込まれる。</li> <li>脱炭素社会に向けた建築物のさらなる省エネ化(躯体の改修等)・創エネ化(太陽光パネルの設置等)の進展や、EV充電設備の普及促進によって工事が増加し、電動工具のさらなる需要拡大が期待される。</li> </ul>
分析の前提条件	<ul style="list-style-type: none"> <li>グローバルでの建築・建設工事量増加を受けた、電動工具の需要の高まりを想定</li> <li>建築・建設市場規模の統計情報を基に、電動工具の売上のベースライン(成り行きシナリオ)を算定</li> <li>建築・建設業界のデータやIEAのシナリオデータを参考に、脱炭素社会に向けた建築物の省エネ・創エネ工事量やEV充電設備の設置工事量を設定(2℃未満シナリオ)</li> </ul>
分析結果	<ul style="list-style-type: none"> <li>電動工具の売上は成り行きシナリオでも拡大が想定されるが、2℃未満シナリオでは省エネ・創エネ工事量やEV充電設備の設置工事量の増加により、大きく拡大すると見込む。</li> <li>中でも、作業効率性に優れた充電式の電動工具は、建築・建設市場での使用の増加が見込まれる。</li> </ul>
今後の機会獲得施策	<ul style="list-style-type: none"> <li>市場動向を踏まえた電動工具の開発、中でも作業効率の向上を通して環境負荷低減に貢献する充電式工具の積極的な開発</li> <li>販売・サービス拠点網の拡充による、販売・サービス力の強化</li> <li>販売拡大を見据えた物流機能および生産能力の増強</li> </ul>

テーマ3(リスク)：リチウムイオンバッテリーに関するリスク(調達コスト、高性能な次世代バッテリーの台頭)

テーマに含まれるリスクの内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>自動車産業やエネルギー産業におけるリチウムイオンバッテリー(LiB)の需要拡大により、LiB調達コストの変動が予想される。</li> <li>高性能な次世代バッテリーの台頭による競争環境の変化が予想される。</li> </ul>
分析の前提条件	<ul style="list-style-type: none"> <li>LiB単価に関する市場予測情報を参考に、同単価のベースライン(成り行きシナリオ)を算定</li> <li>LiBの原材料費(リチウム、ニッケル、コバルト)の過去データを基に、LiBの需要が高まった場合、高騰する原材料費を設定(2℃未満シナリオ)</li> </ul>
分析結果	<ul style="list-style-type: none"> <li>成り行きシナリオおよび2℃未満シナリオともに、LiB単価はバッテリーメーカー・材料メーカーでの増産計画等を背景に、中長期的に下落する見通し。EVや蓄電池等での需要拡大により、LiBの原材料の需給バランスが崩れた場合、LiB単価が高騰する可能性があるが、長期的な影響は軽微と見込む。</li> <li>次世代バッテリーの市場化の予測は困難ではあるが、EV市場の牽引により中長期的には次世代バッテリーが普及し、当社製品分野においても台頭することにより競争環境が変化すると見込む。</li> </ul>
今後のリスク対策	<ul style="list-style-type: none"> <li>バッテリーサプライヤーとの長期的な関係構築</li> <li>次世代バッテリーを使用した製品発売に向けた研究開発</li> </ul>

テーマ4(リスク)：カーボンプライスの引き上げによる操業コスト増加のリスク

テーマに含まれるリスクの内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>炭素税や排出量取引制度等のカーボンプライシングの導入やカーボンプライスの引き上げによる操業コストの増加が予想される。</li> </ul>
分析の前提条件	<ul style="list-style-type: none"> <li>カーボンニュートラルに向けたGHG排出量の削減計画およびIEAのシナリオデータ等を基に、長期的なGHG排出量の削減経路を設定</li> <li>GHG排出量の削減対策等のコストを設定</li> <li>IEAのシナリオデータを基に、将来のカーボンプライスを試算し、上記の対策コストと比較</li> </ul>
分析結果	<ul style="list-style-type: none"> <li>GHG排出量の削減対策を積極的に行わない場合、GHG排出量に応じたカーボンプライスよりも、再生可能エネルギーの活用をはじめとしたGHG排出量の削減等を積極的に進めた場合のコストの方が安価であると評価。</li> </ul>
今後のリスク対策	<ul style="list-style-type: none"> <li>再エネ電力調達の推進、自家消費型太陽光発電の導入・拡大</li> <li>事業活動のエネルギー効率のさらなる向上</li> <li>商用車のEV化の推進</li> </ul>

#### (4) 今後の方針・取り組み

気候変動による事業・戦略・財務への影響を定性・定量的に評価・把握した結果、当社製品が気候変動の緩和・適応へ貢献するなど、気候変動に対し財務的にレジリエント（強靱）であることおよび事業戦略に実行可能性、持続可能性があることが確認できました。

当社製品の中でも安全性、利便性、快適性の向上、使用時の排ガスゼロなどの特長がある充電製品については、特に気候変動の緩和・適応に大きく貢献する製品であると考えています。また、(3) シナリオ分析結果には含まれていませんが、成り行きシナリオでは風水災の頻発化・激甚化も想定される中、被災地域における復旧・復興に貢献する当社充電製品の迅速・安定供給を行うことが重要であり、その実現のための体制づくりを継続的に行ってまいります。今後も「充電製品の総合サプライヤー」に向けた取り組みを推進していくことで社会に貢献し、持続的な成長につなげてまいります。

#### (5) 脱炭素社会への移行計画

当社は2005年、業界に先駆けてリチウムイオンバッテリーを使用したプロ向けの電動工具の販売を開始し、その後、充電製品への置き換えを戦略的に推進しています。また、自社の事業活動でのGHG排出量を2040年度(2041年3月期)までに実質ゼロにする目標を掲げ、GHG排出量の削減に積極的に取り組んでいます。

これらの緩和策の実効性を確保・向上していくために、関連する「指標と目標」を設定し、気候変動ガバナンスのもとでそれらの実績・進捗・達成状況を監視・監督して、移行計画を定期的に見直し・更新していきます。また、脱炭素社会に向けた機会の獲得・最大化についても、移行計画の中で戦略的に実行していきます。

#### 1.5℃目標の達成に向けた移行計画の概要

気候変動の緩和	GHG排出量の削減	<ul style="list-style-type: none"> <li>GHG排出量(Scope 1、2)を2040年度(2041年3月期)までに実質ゼロ</li> <li>中期目標として、2030年度(2031年3月期)までに2020年度(2021年3月期)対比で50%削減</li> </ul>
	脱エンジン	<ul style="list-style-type: none"> <li>OPEの電動化比率(2022年度(2023年3月期)実績:91.9%)の向上</li> </ul>
機会の獲得・最大化	シナリオ分析結果を踏まえた下記施策の戦略的実行 <ul style="list-style-type: none"> <li>充電製品(電動工具およびOPEを含む)の積極的な開発</li> <li>販売・サービス拠点網の拡充</li> <li>販売拡大を見据えた物流機能および生産能力の増強</li> </ul>	

#### リスク管理

当社は、事業活動におけるリスクの抽出・精査を行う開示委員会を毎年開催し、その中で気候変動に関わるリスクについて評価・管理しています。気候変動のリスク・機会の詳細については、サステナビリティ委員会のもとで評価・管理しています。

取締役会では、気候変動が重要な外部環境リスクの一つであるとの認識のもと、気候変動が経営に及ぼす影響について議論し、脱炭素社会の実現に貢献する経営戦略、施策を決定しています。

このような気候関連のリスク管理の体制・運用を強固にし、気候変動対応をより一層強化していきます。

#### 指標と目標

##### GHG排出量に関する目標

当社グループでは、自社の事業活動でのGHG排出量(Scope 1、2)を2040年度(2041年3月期)までに、サプライチェーン全体でのGHG排出量(Scope 3)を2050年度(2051年3月期)までに、それぞれ実質ゼロにすることを目標として設定しました。また、Scope 1、2については、2030年度(2031年3月期)までに2020年度(2021年3月期)比で半減することを中期目標とします。

##### GHG排出量に関する目標と実績(t-CO<sub>2</sub>)

	2020年度 (2021年3月期)実績	2030年度 (2031年3月期)目標	2040年度 (2041年3月期)目標	2050年度 (2051年3月期)目標
Scope 1、2	89,673	44,836	実質ゼロ	
Scope 3	6,006,569	-	-	実質ゼロ

注：2022年度(2023年3月期)のGHG排出量はP.36をご覧ください。

上記目標の達成に向けて、再生可能エネルギーの活用等を通じたGHG排出量削減への取り組みを着実に進めてまいります。

##### OPEの電動化に関する指標

シナリオ分析の「テーマ1(機会)：OPEの脱炭素化による充電式OPEの需要変化」に記載の通り、脱炭素社会に向けて、エンジン式から充電式への移行が進展しています。当社では、電動化(脱エンジン)比率を指標として設定し、同比率の向上に努めています。なお、当社はOPEを含めた**全エンジン製品の生産を終了しました**。

##### OPEの電動化比率\*に関する指標と実績

2019年度 (2020年3月期)実績	2020年度 (2021年3月期)実績	2021年度 (2022年3月期)実績	2022年度 (2023年3月期)実績
86.1%	88.5%	90.9%	91.9%

\* 販売台数ベース。充電式に加え電源コード付のAC製品を含む

これからも、気候変動問題を中心とした環境問題の解決に貢献していくために、エンジン式からの置き換えを可能とする充電式OPEの積極的な開発等を推進していきます。